



うぶがた
生方たつゑの風景

— 『心の花ごよみ』¹⁾ にみる生身の声 —

呉大学エクステンションセンター
深川 賢 郎

■ 生活に咲く花

歌人、生方たつゑは2004年1月18日他界した。享年95歳であった。彼女の死をいたんで、歌人石本隆一氏は翌日の新聞に次のような文章を書いた。

「生方たつゑ氏は、三重県伊勢の温暖な地に生まれ、日本女子大学家政科を卒業されたのち、雪深い上越国境近くの沼田の旧家に嫁がれた。そののち十年近くを風土の落差と、人間関係の違和におびえ、その負を埋めるべく歌作を始められたという」²⁾

生方たつゑは、結婚当初の事情について、『心の花ごよみ』¹⁾ に次のような一文を書いた。

「華麗であるべき青春のゆめが、次第に私の胸の中で錯乱しはじめていた。今、私がゆられながら運ばれていこうとしている奥利根の上流地点は、峻厳な岸壁にせばめられ、その傾斜は墓標群のように白い雪を刷いて荒涼をむき出しにした風景であった」

大学卒業と同時に、雪深い山国に嫁いだ生方は、慣れない環境、旧家の持つ家風、人間関係の重圧にあえいだ。厳しい環境の中で、幼少期を過ごした暖かい三重の海への回帰を願う心は強かった。ふるさとの海やそれを取り巻く風景の持っていた暖かな記憶は、彼女の心の憧憬であった。望郷の念を抱きながら、日常の些事に耐えて、彼女は自分の存立を守った。息苦しい日々は、やがて彼女を文学にいざなうこととなった。それは、生活のなかに咲いた短歌であった。生方は言う。

「生活の花は、愛の労作である。」

「気がとおくなるような寒い早春の雪の夜、手をかじかませながらローケチ染めをやり、それがいつか、短歌におきかわっていった経路を考えると、今も私の胸は熱くなる。くらしの中に埋もっている花をほり出す操作が、何と苦しかったことか。そして、また何と私を心よらしめてくれたことか」

生方は、生活のなかの花をもとめて、生きた。そして、やがて咲く日のあることを期待し、じっと土の中で耐えていた。現実生活の放棄や安易な決別をすることはなかった。

「天井がずっと高く、石炭色をした太いはしらに区切られた古家の歴史の重さが、ひよわな私を押しつぶすようであった過去の時間が、何故かこの山原の秋くさの中に座ると蘇る。

昔むかしの私のこと。私は家の重さの中で、家を放擲する勇気ももてず、さりとて忍ぶにはあまりに障害が多すぎることに悩みつづけた。家霊の重さにひしがれた、といえは大ききであろうか。」

「はげしい現実の拒絶と忍耐の抱合を、私は時に短歌の美しい開花のためにくり返しあたためた」

ふかがわ けんろう

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学エクステンションセンター

「よろこびの溢れるときも、怨嗟に苦しむときも、子が病んでたよりなくいるときも、心の安全弁をひらくように、私は短歌を書いた。」

「私は歌を作りつづけたために、『心の失調』から救われて生きたとも思う」

こうした営みが彼女を鍛え、感性は磨かれていったのである。生活の苦悩が作歌の肥やしとなり、心の風景をみつめる鋭いまなざしが、作品を練り上げた。作品を作り続けることが、「自分らしく生きる」ことへの宿命的な出会いとなっていた。生方は、生活の中から見つけ出した真実や美なるものを「生活の花」としてとらえ、表現し、それを終生、追い求めたのである。

■ 花なき里の花

桜の満開、もみじの錦は眼前の景として美しい。私たちは、この風景を愛でるために桜の満開が訪れると、花見の宴をし、秋の山野が色づくころには、もみじ狩りに出かける。しかし、花やもみじの美しさは、目の前に展開している実際の風景だけではない。兼好法師の残した『徒然草』137段に、次のような一節を見ることができる。「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春のゆくへ知らぬも、なほ、あはれに情け深し。」³⁾とある。月も桜も見えない状態で、それを見たいとこいねがう心に、月も花もより鮮明に浮かんでくるというのである。

『心の花ごよみ』に、藤原定家の歌が紹介されている。

見渡せば花ももみじもなかりけり浦のとまやの秋のゆふぐれ

(桜の)花も(秋の)もみじもない、荒涼とした秋の夕暮れの寂しい風景の中に、定家は何を見たのだろうか。生方は、その心を次のように描いている。

「世阿弥の『せぬひま』という言葉の意味を、この冬の自然の山の草木は、だまっておのれの身に課している。『舞なき舞』の重い心の緊張を、この植物たちは土の下でこたえているのである。花のない花の美しい緊張は、ビルの中に飾られていて枯れることを知らぬ造花より、はるかに勝ったひきしまる輝きをもっている」

世阿弥の『せぬひま』という表現は、「動作をじっと殺してすごす間(ま)」の大切さを述べたものであろう。『舞なき舞』の重い心の緊張とは、舞の動作と動作との間を指している。表現したい部分をじっと我慢して、見る人の心(イメージ)を掻き立てる。冗舌になることを避けて、裏に潜めた重い意味を読みとらせようということである。

生方は、日本の古典がとらえた、自然の持つ姿の伏線にしくまれた美にあこがれ、現代の美の喪失を嘆いている。枯れがれに、色も光も薄く、見るべきなものもない風景を見て、「花ももみじも描きえた日本のかつての民族のところがにおう」と指摘する。「無が有であるという無限大のこのみごとさを自然からよみとっていたくらし」が彼女の求める境地なのである。これ見よがしにむき出しにする、過剰な表現は、三文役者の仕業であろう。洗練された日本の美は、イメージによる創造のまなこにしっかりととらえられていた。

このような描写の中に、作者の姿は重ねられている。人知れず生きている自分の姿が花の中に顕在化し、はっきりと見えていたのではないだろうか。「かたくりの花」の章の次の一文がこのことを裏付けている。

「たった一時期人知れず開花するために、じっと根にかえって、長い季をたえるつつましい花を見てみると、私は人間にもかたくりの花のようなロマンが、どこかにかくされていそうに思えてくるのである。」

かたくりの花のいとなみは、まぎれもなく生方の生活の姿、「花なき里の花」なのであった。豊かなイメージの中に生きる歌人の、雄大な舞台がそこに展開している。

■ 花に殉じる

『心の花ごよみ』には、何人かの人の死が控えめに述べられている。

「まんさくの花」の章には、まんさくの美しさを紹介するために、生方を山峡にさそったカメラマンKが出てくる。彼は、雪庇を踏みあやまって、カメラとともに薄氷の張った湖に沈んだ。まるで、まんさくの花の美しさに殉じたかのように。Kの死はあっけなかった。瞬時のできごとであった。生方は、Kの死について、それ以上にも語らない。ただ、まんさくの花は、芳香を放ち、「耐えてきたものの静かな発散のようでもあり、狂気をしずめた春のよろこび」のしるしでもあるようだ、という。雪崩によって「欠損した山肌の鋭さを被う」ように、まんさくは咲く。「寡黙に、いたみを和らげるだけが、わが花のいのち、だといわんばかりに、ひそかに花を終わる」とも述べている。

Kの死は、まんさくの花のたくらみであり、Kもそれを甘んじて受け入れた、とでも言いたいようである。

「りんどうの花」の章では、「つつましく、すべて忍従のかたちのように生き、その苦しさを一切口に出すことなく死んだM子さんの死」が述べられている。「口かずは少なかつたけれど、沈着で、明晰で、美しかったM子さんは、りんどうの花におのれの憂さを仮託していたのかもしれぬ」と述べる。M子さんは、「名門から名門へ身柄を移されたような結婚をした。」しかし、それは「危険なもろい栄光であった。」M子さんの死は、「豪華をきわめた邸内の台所で」「覚悟が先行した整然とした死に方であった。」M子さんは、りんどうを愛し、りんどうの花のように生き、りんどうの咲く季節に、自ら死んだのである。

嫁いだ先での人間関係に疲れ、谷川岳で凍死した「浩子」も、生方が心にかけてた女性であった。「浩子は雪の花のなかで死んだ。誰が阻止しようとも、誰が説得しようとも、彼女の温和そうに見えた心の中で、死への覚悟」はすすんでいたのであろう、としている。生方は、浩子の死を悼んだ。「雪の上を、ときたまチェーンをまいた車が疾りさる音をきくと、私は女の足首にまかれた鎖の鳴る音の錯覚をもつことがある」と述べている。

生方から、リラの花をもらった日、行方知れずになった女もあった。

生方は、花の持つ生命力や美しさを説くが、花の中に潜む魔性については一言も触れていない。しかし、彼女の花にまつわる物語や体験は、追い詰められた人間の耐えて生きる姿を明らかにしている。花の魔性にとらわれ、命を落としていく人間もあった。「チェーンをまい」て走る車の音をきくと、「女の足首にまかれた鎖の鳴る音の錯覚をもつ」という実感は、生方の本音であろう。それは、生方の「生身の声」なのである。

生方が、花にまつわるエピソードを語る時、その音階はマイナーである。人を死に誘う花の陰に、生方は、自分では気づかないまま、深い怨みを託している。

■ 傷を舐めるけだもの

生方は、あるとき高速道路の建設が予定されている山を歩いた。そのとき「かたわらから急に雉が発った。ああ、この山の棲み家を追われる日がくるであろう。ふるさとを剥奪されて、どこへたまたましいの漂泊があるのだろう。」と述べ、次の和歌を配している。

傷舐めてゐるけだものも濡れており時雨してかの石もぬれゐる

これだけの描写の中で、この和歌を味わうことは難しい。しかし、あえて解釈するならば、つぎのような意味合いが汲み取れるのではないだろうか。

「傷舐めてゐるけだもの」は、時雨にぬれている架空の動物であろう。傷を舐めながら痛みを掻き立て、

麻痺しないように現実をみつめつづける。そのけだものは、生方自身である。暖かい三重の海と故郷を奪われた生方の傷ついた心の化身である。いま、「この山の棲み家を追われる」雉も同じ運命にある。「かの石」も濡れている。この言葉を放った瞬間に、「石」と生方は一つになる。無機質の石よ、お前も私とおなじように濡れている。「雉」と「石」と「生方」の三者が一体となって冷たい時雨に黙って濡れている。逃げることもならず、身をかばうものもなく、冷たい時雨が沁みとおってくる。自然との抱合である。

生方は、現在、群馬県沼田市の名誉市民として敬愛され、文学館も作られている。しかし、生方の心の底流には、傷ついたけだもののように、傷を舐め、時雨に打たれる痛恨のうめき声が流れている。それは、旧家に嫁いだ女の、足枷の重さにうめく怨念の声かもしれない。その声は、和歌という芸術品に昇華されて、読む人々の心を癒している。しかし、歌の愛読者は、美しい「花」の豊かな情感の裏にひそむ魔性と、身を刻む「生」の重圧に耐えた生方の痛みを忘れてはならない。

(2006年9月20日)

参考文献

- 1) 生方たつゑ：『心の花ごよみ』，文化出版局，1980
- 2) 中国新聞：2004年1月19日 朝刊
- 3) 安良岡康作：『徒然草全注釈』下巻，角川書店，1968